

“EARTHLIFE”の活動

藤原 敬

1. 英国からの来客

海外林業協力室には、月平均10~20名程度の外国人が訪問する。主として JICA 受入れ研修員の林野庁「表敬」であり、相手が長官であれば、当方も長官が、部長クラスであれば指導部長が、それ以外であれば海外林業協力室長が応待している。いずれにせよ年間二百名近い外国人来客の大半が開発途上国の林業関係者ということである。先般 英国大使館を通じて英国人の Forester Mr. Clive Wicks が来訪したのは先進国の訪問者として、きわめてまれなケースであった。

彼の名刺のタイトルは BIORESOURCES 社の OPERATION DIRECTOR。英国に本拠をおき熱帯降雨林を活動対象とする“NGO”（非政府機関）である EARTHLIFE FOUNDATION（地球の生命基金）が事業を実施するために設立した民間会社のいわば事業部長である。

彼の語るところによって、この NGO のユニークな活動の一端を紹介したい。

2. A BUSINESS APPROACH TO CONSERVATION

BIORESOURCES 社=EARTHLIFE 基金の活動のキーワードは“A BUSINESS APPROACH TO CONSERVATION”（ビジネスを通じた保全？）である。

この機関は、カメルーン、ペルー、マレーシアの各国においてフィールド活動を行っているが、その中心は、熱帯林で生産されるあらゆる生産物（あらゆる動植物）で現在地元住民が利用しているものの、品目名、利用法のリストを作りあげる作業である。このリストに ETHNOBIOLOGICAL（民族生物学的）DATABASE の名前を付けているそうだが、若いボランティアのチームが長期間熱帯降雨林の集落に滞在し、太陽電池つきのマイコンを持ち込んで連日のフィールド調査で明らかになった、有用生物のデータを打ち込んでいるのだそうだ。本人も袋の中からなにやら真黒い木片（？）のようなものを取出し“これはペルーのアマゾン地域のグループが採取したもので傷口に当てると化膿しない”のだとか。このような、有用生産物（と思われる物）はロンドンの本部にいる化学分析グループによって抽出成分の分析、分離が行なわ

FUJIWARA, Takashi: Activities of “Earthlife Foundation”

林野庁指導部計画課海外林業協力室

れ、この結果もデータベースに付加される。

このデータベースにもとづいて各種物質の商品化のための研究が行われるところがミソであり、このことが、プロジェクト全体に民間資金が流入する契機となっている。これが BUSINESS APPROACH と看板を掲げるゆえんである。

もちろん生産物の商品化がプロジェクトの唯一の目的ではなく、これらのデータベースが、アグロフォレストリーの発展、住民生活向上などのプロジェクトに生かされてゆくことになる。そして何よりも、これらの活動の結果、熱帯降雨林の持つ多様な価値が広く深められることが、熱帯林保全のための世論形成にとって重要な役割を果たすはずである、というのがプロジェクトの立場なのである。

3. What do you want us to do ?

帰国前日のあわただしい日程をぬっての林野庁来訪であったため、プロジェクトの具体的な成果などについて聞くことができなかつたのは残念であったが、大変ユニークでおもしろい話であった。一通りの氏の説明が終つたあと What do you want us to do ? (それで日本の林野庁に何をしてほしいのか?) と聞いてみた。「興味があるなら我々のプロジェクトに 機材供与などの援助をしてほしい」。当方からしばらく日本の援助の仕組みについて説明し、「カメルーン政府から援助要請が出てくれば我々としても実現方支援する」ことを約束して別れたことであつた。

今後我が国のプロジェクトも、このような各国のプロジェクトと連携をとりながら進めてゆくケースも多くなつてゆくであろう。